泉大津市文化財調査報告27

豊中遺跡発掘調査報告書

1995・3

泉大津市教育委員会

泉大津市文化財調査報告27

豊中遺跡発掘調査報告書

1995・3

泉大津市教育委員会

1区　(東側部分)

1区　(西側部分)

1区　井戸1

1区　井戸2

序　　文

わたしたちの町泉大津は、「土佐日記」に「をづのとまり」、「更級日記」に「大津といふ浦」と記されていることから、古来より開けていたことがうかがえます。また、記録の残されていない時代につきましても、多数の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の存在により、私たちの祖先が3千年以上にわたって連綿と生活を営んできた足跡を知ることができます。

その痕跡は発掘調査によって再び日の目を見ることになり、いにしえの人々の文化を復元する基礎資料となるわけですが、残念なことに、遺跡は一度掘るとやり直し発掘はできません。まさに一回限りの生命なのであります。それだけに調査は慎重さが必要となり、その成果は広く公表され、末長く保存されなければなりません。それは、未来に向けての文化創造の糧となるべきものでもあるからです。そういった意味から、本調査報告書が多くの方々に活用され、今後の調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査を実施するにあたり、調査費用をはじめ多大なご協力を賜わりました土地所有者及び事業施工者の方々に、謹んで厚く感謝の意を表します。

平成7年3月

泉大津市教育委員会
教育長　塙　四郎

例　言

1．本書は、泉大津市豊中町に所在する豊中遺跡の第36～38次調査の報告書である。

2．調査は、いずれも民間の開発工事に先立つ緊急発掘調査である。

3．それぞれの調査日程は、以下の通りである。

第36次調査	平成３年４月15日～平成３年７月４日
第37次調査	平成３年11月５日～平成３年12月６日
第38次調査	平成３年12月16日～平成４年１月10日

4．調査は、下記の構成で実施した。

調査主体者	泉大津市教育委員会	
調査担当者	泉大津市教育委員会社会教育課	坂口　昌男
	〃	虎間　麻実
調　査　員		辻川　陽一
		佐野　みゆき
		松村　まゆみ
調査補助員		笠井　美鈴

5．本書執筆は、第Ⅰ章第３節を坂口、その他は虎間が行った。

6．本書の編集は、虎間が行った。

凡　例

1．本書に掲載する遺物の番号は、調査地点毎の通し番号とし、この番号は、本文・挿図・図版ともに共通している。

2．標高は東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．）を基準とし、m単位で表示している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　豊中遺跡の環境 ……………………… 1
第1節　地理的環境 ……………………… 1
第2節　歴史的環境 ……………………… 3
第3節　既往の調査 ……………………… 4
第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過 ……………………… 7
第1節　調査に至る経緯 ……………………… 7
第1項　概　要 ……………………… 7
第2項　第36次調査地点 ……………………… 7
第3項　第37次調査地点 ……………………… 7
第4項　第38次調査地点 ……………………… 7
第2節　方法と経過 ……………………… 8
第1項　第36次調査 ……………………… 8
第2項　第37次調査 ……………………… 8
第3項　第38次調査 ……………………… 8
第Ⅲ章　第36次調査の成果 ……………………… 9
第1節　層　序 ……………………… 9
第1項　基本層序 ……………………… 10
第2項　包含層出土遺物 ……………………… 10
第2節　遺構各説 ……………………… 10
第1項　掘立柱建物 ……………………… 10
第2項　柱　穴 ……………………… 16
第3項　溝 ……………………… 18

第4項　井　戸 …………………………………19
第5項　土　坑 …………………………………23
第Ⅳ章　第37次調査の成果 ……………………31
第1節　層　序 …………………………………31
第1項　基本層序 ……………………………31
第2項　包含層出土遺物 ……………………31
第2節　遺構各説 ………………………………37
第1項　掘立柱建物 …………………………37
第2項　柱　穴 …………………………………37
第3項　土　坑 …………………………………38
第Ⅴ章　第38次調査の成果 ……………………39
第1節　層　序 …………………………………39
第1項　基本層序 ……………………………39
第2項　包含層出土遺物 ……………………41
第Ⅵ章　ま　と　め ……………………………42

挿　図　目　次

第１図　豊中遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第３図　豊中遺跡調査地点位置図(1/5000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第４図　調査区位置図(1/600)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第５図　包含層出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第６図　１区遺構平面図及び西壁・南壁土層断面図(1/100)・・・・・・・・・・・・・11・12
第７図　２区遺構平面図及び西壁・南壁土層断面図(1/100)・・・・・・・・・・・・・・13
第８図　掘立柱建物１平面図(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第９図　掘立柱建物１～４出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第10図　掘立柱建物２平面図(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第11図　掘立柱建物３平面図(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第12図　掘立柱建物４平・断面図(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第13図　柱穴出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第14図　溝１・溝２断面図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第15図　溝１・溝２出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第16図　井戸１平・断面図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第17図　井戸１出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第18図　井戸２平・断面図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第19図　井戸２出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第20図　井戸３出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第21図　土坑１出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第22図　土坑３断面図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第23図　土坑２・３出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第24図　土坑４出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第25図　土坑５断面図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第26図　土坑５出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第27図　土坑６断面図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第28図　土坑６出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

第29図　基本層序(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第30図　包含層出土遺物１(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第31図　包含層出土遺物２(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第32図　包含層出土遺物３(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第33図　調査区位置図(1/600)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第34図　遺構平面図(1/80)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第35図　掘立柱建物１平・断面図(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第36図　掘立柱建物１・柱穴出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第37図　土坑１出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第38図　西壁（上）・南壁（下）土層断面図(1/100)・・・・・・・・・・・・・・・39
第39図　調査区平面図（1/400)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第40図　包含層出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

表　目　次

第１表　豊中遺跡既往調査一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

図 版 目 次

巻頭図版１	上	第36次調査　１区（東側部分）	下	第36次調査　１区（西側部分）
巻頭図版２	上	第36次調査　１区井戸１	下	第36次調査　１区井戸２
図版１	上	第36次調査　１区（東側部分）	下	第36次調査　１区（中央部分）
図版２	上	第36次調査　１区（西側部分）	下	第36次調査　２区全景（南から）
図版３	上	第36次調査　１区井戸１（南から）	下	第36次調査　１区井戸２（南から）
図版４	上	第36次調査　２区土坑３（左）・井戸３（右）		
	下	第37次調査　全景（南から）		
図版５	上	第37次調査　掘立柱建物１（南から）	下	第38次調査　近景（北から）
図版６		第36次調査出土遺物		
図版７		第36次調査出土遺物		
図版８		第36次調査出土遺物		
図版９		第37次調査出土遺物		
図版10		第36次調査出土遺物		
図版11		第36次調査出土遺物		
図版12		第36次調査出土遺物		
図版13		第36次調査出土遺物		
図版14		第36次調査出土遺物		
図版15		第37次調査出土遺物		
図版16		第37次調査出土遺物		
図版17	上	第37次調査出土遺物	下	第38次調査出土遺物

第Ⅰ章　豊中遺跡の環境

第１節　地理的環境

豊中遺跡は、大阪府泉大津市豊中町に所在する。泉大津市は大阪府の南部に位置し、いわゆる泉州地域に属する。泉州とは堺市以南の地域を指し、なかでも堺市から泉大津市にかけては泉北地区と呼称される。泉州地域の東部には、大阪湾に沿って東西に和泉山脈が連なる。その山脈を源とし、幾多の河川が北に走行し、大阪湾へと注ぐ。これらの河川は、それぞれ開析谷、河岸段丘を形成し、その両側には、丘陵地形が南北方向に発達している。その丘陵部より北側は、平坦で狭小な沖積地が形成されている。泉大津市は、この沖積地上に立地しており、市域の標高は20m未満である。面積は12.30㎢である。

泉大津市は市域の西側を大阪湾に面し、北は高石市、東は和泉市、南は大津川を挟んで忠岡町に接する。大津川は、この付近の水資源として活用されている。

豊中遺跡は市域の東部に位置するが、この付近は、隣接する和泉市域より西へ延びる信太山丘陵の一部がおよんでいる。豊中遺跡は、この信太山丘陵のさらに西に派生した舌状に張り出した低位段丘に位置する。遺跡の標高は12〜18mを測る。

遺跡の範囲は、南海線泉大津駅より東南東に約1800m、ＪＲ阪和線和泉府中駅より北に900mの付近を中心に、東西約800m、南北約1000mの規模をもつ。

調査時の地目は、耕作地および宅地であるが、近年の市街地開発の波により、耕作地は減少傾向にある。

第１図　豊中遺跡位置図

第２節　歴史的環境

泉州地域は気候が温暖なため、古くから生活の場、生産の場として開けていた。泉大津市は、丘陵部を有しないが、海岸部を除くほぼ全域が遺跡および遺物の散布地となっている。現在市内で確認されている遺跡は20箇所余りにのぼる。時代、規模ともに様々である。これらの各遺跡について時代を追って述べる。

現在のところ、本市では旧石器時代に属する遺構、遺物の発見はないが、高石市、和泉市と本市にまたがる大園遺跡では、ナイフ型石器が出土している。

縄文時代も明確な遺構は検出されていないが、市域の東部に位置する板原遺跡、豊中遺跡、虫取遺跡では、中期～晩期の土器片が出土している。

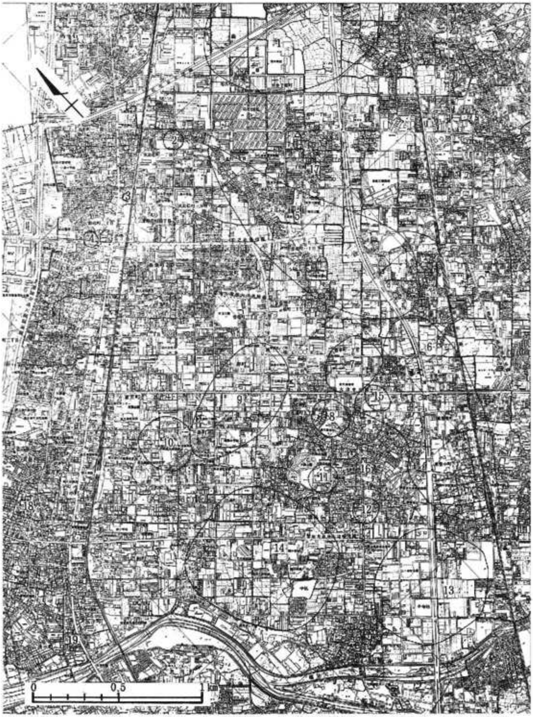
弥生時代の遺跡は３箇所確認されている。池浦遺跡、虫取遺跡、池上・曽根遺跡で、このうち池上・曽根遺跡は、弥生時代の全時期を通じて、集落の生成、発展がうかがえる遺跡として1976年に国の史跡指定がなされている。これらのほかに弥生時代の遺物散布地としては、七ノ坪遺跡、助松遺跡、穴師小学校校庭遺跡がある。

古墳時代に属する遺跡は、豊中遺跡、七ノ坪遺跡、東雲遺跡などである。なかでも豊中遺跡は、古池、上池内からの多量の木製品の出土とともに、古墳時代前期におけるこの地域の拠点的な集落と考えられる。

平安時代～鎌倉時代に至る遺跡は、豊中遺跡、東雲遺跡である。豊中遺跡では、この時期に数多くの井戸がみられる。また遺構、遺物による確認はされていないが、苅田城、真鍋城、千原城、城の山が中世の城館跡としてあげられる。

室町時代以降の明確な遺構はほとんど確認されていないが、豊中遺跡で、鉄鍋で蓋をされた甕が土坑内から検出されている。この時期に属する蔵骨器と考えられている。遺物散布地として、虫取遺跡、穴師遺跡などがあげられる。

また、豊中遺跡内には、大福寺の小字名が残っている。創建年代は明らかでないが、同名の寺院が明治時代まで存続していたとされている。現在のところ寺院の遺構は確認されていない。



1．大園遺跡　2．森遺跡　3．滝塚　4．助松遺跡　5．池上曽根遺跡　6．豊中遺跡　7．七ノ坪遺跡
8．穴師遺跡　9．池浦遺跡　10．東雲遺跡　11．穴師薬師寺跡　12．穴田遺跡　13．板原遺跡　14．虫取遺跡
15．大福寺跡　16．菟田城跡　17．千原城跡　18．真鍋城跡　19．城の山

第２図　遺跡分布図（1/10,000）

第3節　既往の調査

豊中遺跡は、南北約1,100m、東西約500mの範囲を有する遺跡で、一部は和泉市域に及んでいる。遺跡内を国道26号線が貫通し、両側は土地区画整理事業が実施され、店舗や共同住宅、個人住宅が主に建築されており、水田部は減少しつつある。

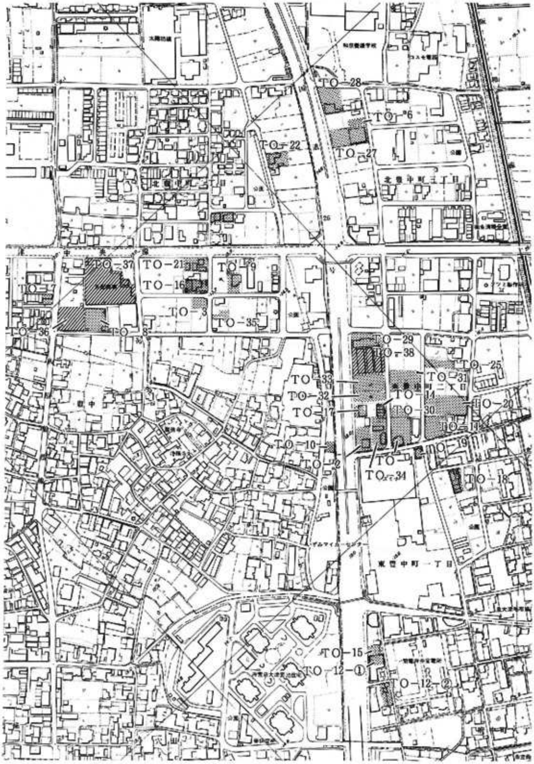
豊中地域は昭和50年頃までは、条里制による畦畔が整然と残る水田地帯であった。建設省は大阪万国博覧会関連事業として、この地域を南北に通過する第2阪和国道（現国道26号線）の建設を予定し、泉大津市も土地区画整理事業の実施を計画した。これらの事業に先立って昭和47年から調査が開始されたのが、本格的な調査の始まりである。

昭和30年代前半に、府立泉大津高校地歴部部員により弥生時代の土器、石斧、石鏃、古墳時代の土師器、紡錘車、奈良時代の須恵器、平安・鎌倉時代の瓦等が発見された。また、昭和30年代後半にも、この地を東西に貫く泉大津中央線が建設された時、同校地歴部員によって土器片が発見され、遺跡の存在が予想された。更に、地区内の古池に大型小売店舗の建設が計画され、池を干上げたところ、池底に須恵器の土器片が散布していた。これにより大阪府教育委員会は昭和47年から48年にかけて池内の発掘調査を実施し、住居跡・倉庫跡・古代の道・河川跡等を検出した。また、昭和48・49年には第2阪和国道敷予定地内を発掘調査し、古墳時代の住居跡、要池部分から鎌倉時代の倉庫建物や掘立柱建物を発見、豊中遺跡の存在が明らかになった。

本市教育委員会は、この地域の土地区画整理事業施工に先立って、豊中・古池遺跡調査会を組織し、昭和48年度～50年度にかけて上池及び街路部分を調査した。その結果、池底には幅約10mの河川が存在し、砂礫層から中期後半に属する縄文土器の破片や布留式の土師器、古式から8世紀までの須恵器、古墳時代の木剣・木刀をはじめ、平安時代までの容器や下駄、建築部材等の木製品を大量に発見した。また街路部分から古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、中世の各種井戸等も検出し、長期にわたる集落遺跡と判明した。

区画整理事業完了後の昭和50年代以降は、住宅等の建設に先立ち39次にわたる緊急発掘調査を実施してきた。その結果、古墳時代初期の竪穴住居や掘立柱建物が検出され、竪穴住居は数棟が1単位となり数箇所に分散していたと想定される。つづいて、平安時代中頃の灰釉陶器や「田井殿」の墨書土器を出土した方形井戸、羽釜、曲物、石組等を井戸枠とする庶民が使用した中世の井戸の存在から、住宅の存在が想定されるが、その痕跡は基礎構造の粗略さから遺存しにくいと思われる。

更に遺跡内には「大福寺」の字名があり、付近からの出土瓦によって、大福寺は平安時代末まで遡ると思われ、明治時代初期に廃寺となるまでの間、存続していた。



第３図　豊中遺跡調査地点位置図（1/5,000）

第１表　豊中遺跡既往調査一覧表

調査番号	調査面積(㎡)	主な遺構　(時期)
TO－1		竪穴住居３棟・溝（古墳）
2	390	井戸６基（古墳）、溝・柱穴（不明）
3	175	竪穴住居１棟（古墳）、井戸４基（中世）
4	70	井戸３基（中世）、溝・柱穴（不明）
5	52	井戸１基・溝・柱穴（不明）
7	45	井戸３基（中世）、柱穴（不明）
8	73	井戸１基・溝・柱穴（中世）
9	313	井戸２基（中世）、柱穴（不明）
11	850	竪穴住居６棟（古墳）、柱穴（不明）
12	230	掘立柱建物２棟・溝（不明）
13	180	竪穴住居１棟（古墳）、溝・柱穴（不明）
15	200	溝・柱穴・土坑（不明）
16	450	井戸２基・溝１条（中世）、柱穴・土坑（不明）
17	126	溝（不明）
18	239	掘立柱建物１棟・溝７条（古墳）、柱穴・土坑（不明）
21	496	溝５条（中世）、柱穴・土坑５基（不明）
25		溝２条（古墳）
30	60	竪穴住居（古墳）
32	360	竪穴住居２棟（古墳）、井戸１基（中世）、溝２条・土坑（不明）
33	460	竪穴住居３棟（古墳）、掘立柱建物１棟・溝１条・柱穴（不明）
34	84	掘立柱建物２棟・土坑（不明）
35	9	柱穴（不明）

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

第1項　概　　要

豊中遺跡では、1991（平成3）年までに国庫補助事業を含め35次にわたる調査を行っている。本報告書は、平成3年度に、豊中遺跡内で行った原因者負担による調査をまとめて報告するものである。調査地点は、発掘調査実施年月日の早いものから順に、第36次、第37次、第38次とした。以下それぞれの地点での調査に至る経緯を述べる。

第2項　第36次調査地点

豊中遺跡の西端に位置する。事業者が社員寮の建設を予定し、埋蔵文化財の届出が提出された。これを受けて、市教育委員会では、平成3年3月26日に予備調査を行い、遺物包含層の確認を行うと共に、遺構の存在の可能性も高いと判断した。また、本調査地点の東隣接地では、第8次調査の結果、中世の井戸及び溝などが確認されている。予備調査の結果、遺構面は現状の地表面から深さ約80cm、T.P.12.5m付近と考えられる。予定建築物の基礎は、現状の地表面より約10mの深さまで掘削が行われるため遺構の破壊は免れない。よって、工事着工に先立ち発掘調査が必要であると判断し、事業者と協議の結果、平成3年4月15日より建物建設面積における全面調査を実施した。

第3項　第37次調査地点

第36次調査地点の北東に隣接する。従来の建物が火災で消失したため、土地所有者が店舗建設を予定し、埋蔵文化財の届出が提出された。後述するが、第36次調査地点で掘立柱建物や井戸などの遺構が確認できた事や、本調査地点の小字名が大福寺で、明治初期まで寺院が建っていたとされる事から、工事着工に先立ち発掘調査が必要であると判断した。事業者と協議の結果、平成3年10月30日に覚え書きを交わし、平成3年11月5日に発掘調査を実施した。

第4項　第38次調査地点

本調査地点は豊中遺跡のほぼ中央部に位置する。土地所有者が店舗建設を予定し、埋蔵文化財の届出が提出された。本調査地点の南隣接地では、第33次調査で竪穴住居や河川状遺構が確認されている。そのため、工事着工に先立ち発掘調査が必要であると判断し、事業者と協議の結果、平成3年11月7日に覚え書き交わし、平成3年12月16日に発掘調査を実施した。

第２節　方法と経過

第１項　第36次調査

調査は、土置き場の確保のため、社員寮建設箇所（600㎡）と浄化槽設置箇所(80㎡）の順に分けて行い、前者を１区、後者を２区とした。調査は１区より開始し、盛土、耕土、床土までを重機により除去し、続いて、人力掘削に着手した。まず、排水溝の役割を兼ねた断面観察用の側溝を設定し、土層の堆積状況を確認しながら掘削を行った。その後、遺構及び遺物の検出を行った。遺構及び土層断面の実測と写真撮影を行い、６月３日に埋め戻しを行った。

２区は、翌６月４日より重機による掘削を開始した。その後、１区と同様の手順で調査を実施し、７月４日に埋め戻しを行い調査を終了した。

第２項　第37次調査

調査は、まず、重機で、盛土、耕土を除去し、続いて人力掘削に着手した。まず、排水溝の役割を兼ねた断面観察の側溝を設定し、土層の堆積状況を確認しながら掘削を行った。耕土の下層で遺物包含層である緑灰色粘質土を確認し、続いて緑灰色粘質土の下層に堆積する灰色シルトを除去し、その下層の灰色粘質土の上面で遺構の精査を行った。第36次調査の結果、遺構は、当該調査区の方向へ延びていると思われたが、第36次調査地点と隣接する南側では遺構は確認できなかった。また、遺構面は、調査区全域にわたり近年の建物基礎部分の掘り方による攪乱を受けていた。そのため、遺構及び遺物の検出は北側に限り行うこととした。遺構及び土層断面の実測、写真撮影を行い、12月６日に埋め戻しを行い終了した。

第３項　第38次調査

調査は、隣接地で行った第33次の調査結果を参考とし、まず、重機で盛土、耕土、茶灰色砂質土まで除去した。 その後、 人力掘削を行ったが、 遺物包含層である茶灰色粘質土と青灰色粘質土よりわずかな遺物を検出したのみであった。これらの層の下層に遺構面に相当すると思われる黄色シルトが認められたため精査をおこなったが、遺構は確認できなかった。旧建物の浄化槽埋め込み時の掘り方と、水田への給排水用の土管が認められただけである。調査区の平面と土層断面の実測及び写真撮影を行い、平成４年１月10日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

第Ⅲ章　第36次調査の成果

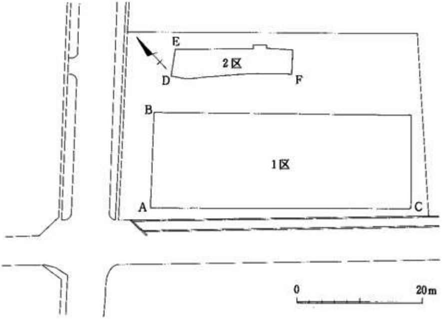
第１節　層　　序

第１項　基本層序

１区・２区ともほぼ同様の堆積状況を示す。その基本層序は上層より、盛土が約10～20cm、近年の耕作土が約10～20cm、これに伴う灰茶色砂質土の床土が約５cmの厚さで堆積しているのが認められる。

この灰茶色砂質土の下層に、遺物包含層である淡灰茶色砂質土が５～10cmの厚さで堆積しているのがみられる。この淡灰茶色砂質土の下層に位置する、黄灰色粘質土の上面で遺構を検出した。黄灰色粘質土は、調査区全域にわたり認められる。今回の調査では、遺構検出が行うことができたのはこの面だけである。

黄灰色粘質土の下層は、１区・２区とも灰色及び黒色を基調とした粘質土と砂の堆積がみられる。



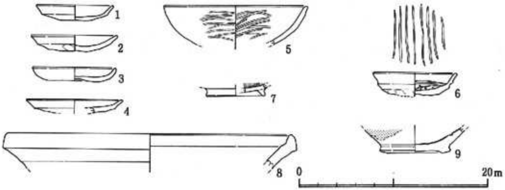
第４図　調査区位置図（1/600）

第２項　包含層出土遺物（第５図、図版６）

包含層には土師器、瓦器など平安時代以降の遺物が多く含まれていたが、いずれも細片で図示し得るものは、わずかである。

１～４は、土師器皿である。口径は8.0～10.0cmの範疇に含まれ、器高は平均1.5cmを測る。５は、瓦器椀である。復元口径15.0cm。内外面ともヘラミガキが密に施される。６は、瓦器皿である。口径8.8cm、器高2.4cmを測る。内面に平行暗文が認められ、ほぼ完形である。７は、黒色土器椀である。復元高台径は、6.0cmを測る。８は、須恵器鉢である。口径はおよそ30cmになると思われる。９は、白磁碗である。復元高台径は、5.8cmを測る。内外面の一部に施釉が認められる。

５の瓦器椀のみ２区で検出した。



第５図　包含層出土遺物（1/4）

第２節　遺構各説

第１項　掘立柱建物

掘立柱建物１（第８図）

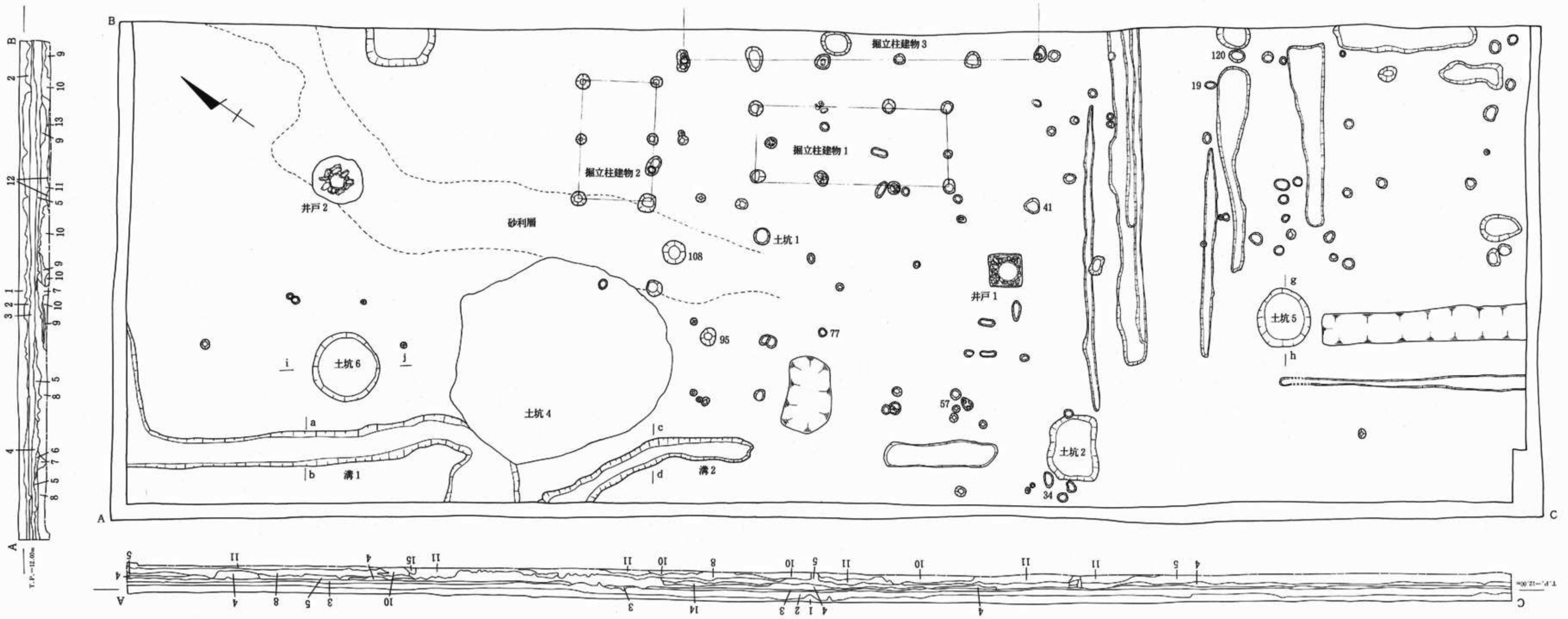
１区の中央部北側で検出した。調査区にほぼ平行する。桁行３間（総長5.6m）、梁間１間（総長2.3m）の規模を有し、桁行の平均柱間は、およそ1.8mである。

掘立柱建物１出土遺物（第９図）

18・21は柱穴82から、19・20は柱穴61から、22は柱穴89からそれぞれ検出した。

18は土師器皿である。復元口径15.0cmを測る。外面はヨコナデが施され、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。

19～22は瓦器椀である。いずれも高台部分のみが残存する。高台径は最も大きいもので7.0cmを測り、小さいもので5.0cmを測る。高台は「ハ」字状に開き、断面形態は台形を呈する。内面見込み部分には暗文が密に施される。

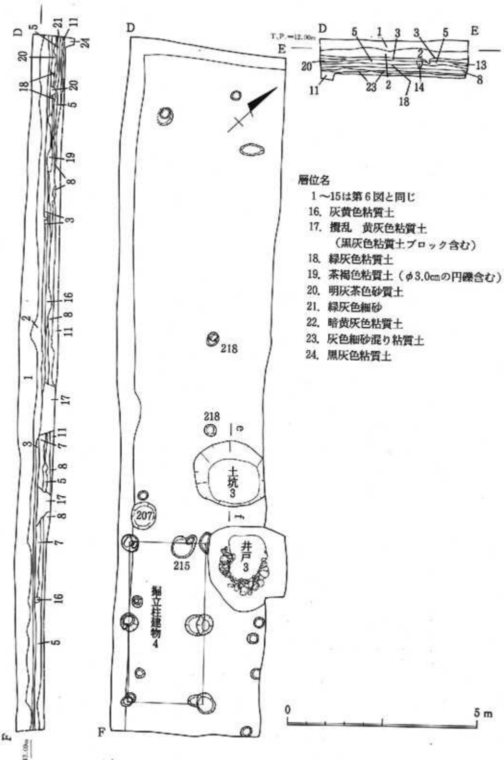


層位名

1．盛土
2．耕土
3．灰茶色砂質土（床土）
4．淡灰茶色砂質土
5．黄灰色粘質土
6．淡黄灰色質土
7．黄灰色砂質土
8．灰黒色粘質土
9．灰茶色粘質土
10．灰色粗砂
11．黒灰色粘質土
12．灰色微砂
13．灰色細砂
14．明黄灰色粘質土
15．灰黒色砂質土

0　5 m

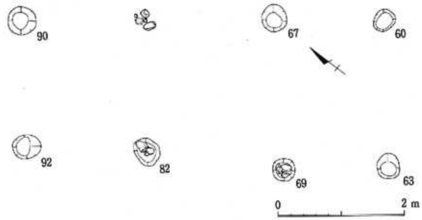
第6図　1区遺構平面図及び西壁・南壁土層断面図（1/100）



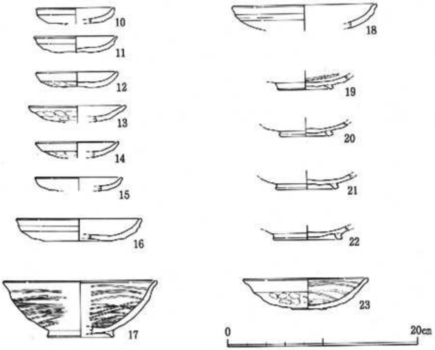
層位名

1〜15は第6図と同じ
16. 灰黄色粘質土
17. 攪乱　黄灰色粘質土（黒灰色粘質土ブロック含む）
18. 緑灰色粘質土
19. 茶褐色粘質土（φ3.0cmの円礫含む）
20. 明灰茶色砂質土
21. 緑灰色細砂
22. 暗黄灰色粘質土
23. 灰色細砂混り粘質土
24. 黒灰色粘質土

第7図　2区遺構平面図および西壁・南壁土層断面図（1/100）



第８図　掘立柱建物１平面図（1/60）



掘立柱建物１（18～22）
掘立柱建物２（17）
掘立柱建物３（23）
掘立柱建物４（10～16）

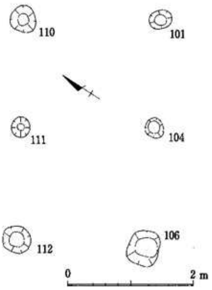
第９図　掘立柱建物１～４出土遺物（1/4）

掘立柱建物２（第10図）

掘立柱建物１の西約２mに位置し、ほぼ直交する建物である。桁行２間（総長3.7m）、梁間１間（総長2.0m）の規模を有する。

掘立柱建物２出土遺物（第９図）

17は、柱穴 110から検出した瓦器椀である。復元口径16.0cm、器高6.0cm、復元高台径6.6cmを測る。口縁部の形態はやや外反し、内面には１条の沈線が認められる。端部を丸くおさめる。高台は、やや高く「ハ」字状に開き、その断面形態は鈍い三角形を呈する。体部外面には、指オサエの痕跡が顕著に認められ、ヘラミガキが密に施されている。口縁部にはヨコナデが施されている。内面調整は、見込み部分に暗文が密に施され、その他の部分にもヘラミガキが顕著に認められる。



第10図　掘立柱建物２平面図（1/60）

掘立柱建物３（第11図）

調査区のほぼ中央部、北壁に沿ってその一部分を検出した。掘立柱建物１と約１m隔てて平行した位置に存在する。その北側部分は、調査区外に延びると考えられ、東西方向の柱穴列５間分しか検出できなかった。その総長は、9.7mを測る。平均柱間は、2.1m。

掘立柱建物１に付随する柵列の可能性も指摘される。

掘立柱建物３出土遺物（第９図、図版６）

23は、柱穴47から検出した瓦器椀である。遺存状態は比較的良好で、ほぼ完存する。口径13.0cm、器高3.2cm、高台径3.0cmを測る。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。体部外面には指オサエが、口縁部にはヨコナデが施される。内面調整は、見込み部分に渦巻状の暗文が施される。高台は極めて低く、形骸化している。

掘立柱建物４（第12図）

２区の南隅で、調査区にほぼ平行して検出した。調査区が狭くその全容は明らかでないが、２間×１間以上の総柱建物が推定される。東西方向の柱間は2.0m、南北方向の総長は4.2mを測る。柱穴217は、井戸３の掘り方と重複している。その新旧関係は、柱穴217の方が古い。

掘立柱建物４出土遺物（第９図）

10～16は土師器皿である。10は柱穴218、11は柱穴210、12・13は柱穴213、14・15は柱穴214、16は柱穴217よりそれぞれ検出した。

10は復元口径8.0cmを測る。口縁部は、やや直線的に立ち上がる。

11は口径8.6cm、器高1.7cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部外面は、指オサエの後、ナデが施される。

12は口径8.4cm、器高1.5cmを測る。内外面とも指オサエが顕著に認められるが、口縁部にはヨコナデが施される。胎土に金雲母を含む。

13は復元口径10.0cmを、14は復元口径8.6cmを測る。いずれも口縁部の端部は丸くおさめられる。また体部外面は、指オサエが顕著に認められる。

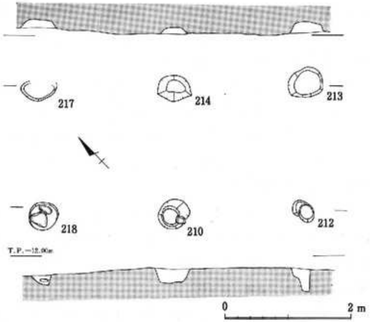
15は復元口径9.0cmを測る。口縁部はわずかに外反する。

16は復元口径13.0cm、器高2.3cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上がる。体部外面は、指オサエが認められ、内面はナデが施される。

第2項　柱　　穴

建物を構成しないもので、1区では100基余りを検出した。その大半は調査区の中央部から東側にかけて、特に調査区東壁から5m付近に最も集中している。掘立柱建物2以西ではほとんど認められない。2区では10基余り検出した。両調査区あわせて、柱穴の掘り方埋土から遺物を検出できたのは、10基以上にのぼる。いずれも柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径は20～50cm前後を測る。

第11図　掘立柱建物3
平面図（1/60）

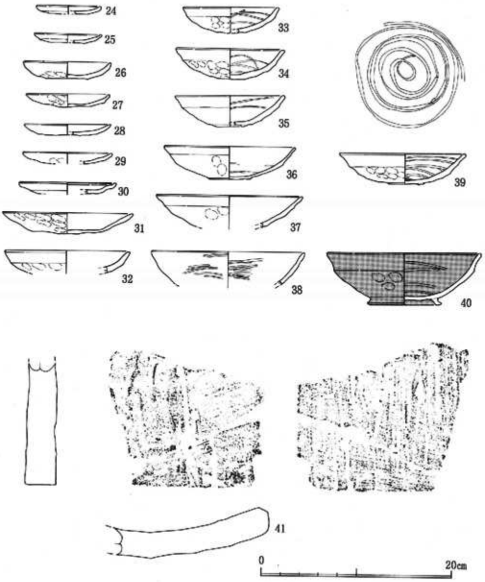


第12図　掘立柱建物4平・断面図（1/60）

柱　穴出土遺物（第13図、図版6・9）

24〜32は土師器皿である。24・25・27〜29は柱穴95、26は柱穴215、30は柱穴207、31は柱穴19、32は柱穴215よりそれぞれ検出した。いずれも遺存状態は不良で復元口径は、6.6〜13.6cmを測る。

33・34は瓦器皿である。33は柱穴41、34は柱穴57より検出した。33は復元口径10.0cm、器高2.8cmを測る。34は口径11.2cm、器高3.2cmを測る。いずれも内面にはヘラミガキ、外面には指オサエが施される。



第13図　柱穴出土遺物（1/4）

35～39は瓦器椀である。35は柱穴34、36は柱穴120、37は柱穴219、38は柱穴207、39は柱穴77よりそれぞれ検出した。口径12.6～16.0cmを測る。高台は扁平で、形骸化している。

40は黒色土器B類椀である。柱穴108より検出した。復元口径16.0cm、器高5.5cmを測る。口縁部外面には、強いヨコナデを施した結果、稜をなしている。磨滅が著しいため調整の詳細は不明である。高台はやや低く、「ハ」字状に大きく開く。

41は平瓦である。柱穴218より検出した。

第3項　溝

溝1（第14図）

1区西隅で検出した。調査区とほぼ平行し走行するが、その両端はそれぞれ逆方向に直角に屈曲する。検出長12.1m、幅0.7～1.5m、深さ0.3～0.4mを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土の堆積は大きくは2層からなる。上層は灰黄色粘質土で、下層は黒灰色粘質土である。

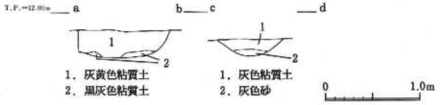
溝1出土遺物（第15図、図版6）

42は瓦器皿である。口径9.2cm、器高2.0cmを測る。内面に平行状の暗文が施される。

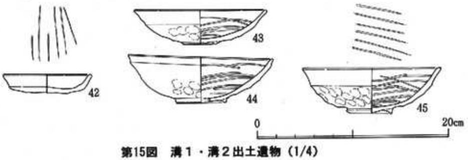
43・44は瓦器椀である。43は口径13.9cm、器高3.6cm、高台径3.1cmを測る。44は口径15.0cm、器高4.8cm、高台径5.0cmを測る。いずれも外面には指オサエ、内面にはヘラミガキが施される。

溝2（第14図）

溝1の東側で検出した。検出長5.7mで、調査区外南側へ延びる。幅0.5～1.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は2層で、上層は灰色粘質土で、下層は灰色砂である。



第14図　溝1・溝2断面図（1/40）



第15図　溝1・溝2出土遺物（1/4）

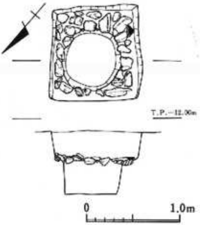
溝2出土遺物（第15図、図版6）

45は瓦器椀である。口径14.2cm、器高4.2cm、高台径4.2cmを測る。体部外面には指オサエ、内面見込み部には平行状暗文が施される。

第4項　井　　戸

井　戸1（第16図、図版3）

1区中央よりやや東側、掘立柱建物1の約2m南で検出した。掘り方は2段に掘り込まれ、上段の平面形態は一辺約1.0mの方形を呈し、下段は径約55cmの円形を呈する。上面よりおよそ0.3mで段をなし、石や瓦を一面に敷き詰める。井戸の深さは検出面から約0.7mを測る。埋土から木片や樹皮の細片が多数検出したため、木製の井筒を使用していたと思われる。



第16図　井戸1平・断面図（1/40）

井　戸1出土遺物（第17図、図版7・10）

46〜55は土師器皿である。口径8.0〜8.8cm、器高は1.2〜1.7cmを測る。いずれも遺存状態は良好である。

56〜58はミニチュア瓦器椀である。56は口径7.9cm、器高2.8cm、高台径3.5cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がりながら端部は丸くおさめる。外面口縁部付近にヘラミガキを施す。

57は口径8.0cm、器高2.4cm、高台径5.1cmを測る。口縁部はゆるやかに外反する。内面見込み部にはヘラミガキを密に施す。

58は口径7.4cm、器高2.4cm、高台径3.8cmを測る。体部外面に2段の稜を有する。口縁部はわずかに外反する。

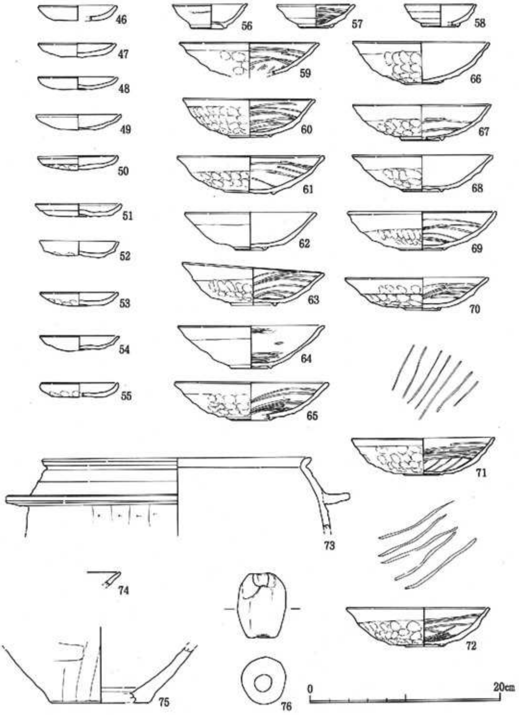
59〜72は瓦器椀である。口径は13.8〜16.0cm、器高は3.3〜4.5cm、高台径は3.0〜5.0cmを測る。遺存状態が良好なものには、内面にヘラミガキが密に施され、見込み部に平行状の暗文が施されているのが認められる。高台は低く、断面形態は鈍い三角形を呈するものと、扁平なものとがある。

73は土師器羽釜である。復元口径27.8cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲する。体部外面には工具による横方向へのケズリが施される。

74は青磁碗である。細片のため口径は不明である。

75は陶器底部である。形態は不明である。復元底径10.0cmを測る。内面には緑灰色の釉が認められる。

76は土錘である。土師質である。筒型を呈し、全長5.7cm、径約4.8cmを測る。孔径1.7cmを測る。



第17図　井戸１出土遺物（1/4）

井　戸２（第18図　図版３）

１区北隅で検出した。調査区北隅から中央部分に約1.5ｍの幅で堆積する砂利層の上に位置する。掘り方の平面形態は、長径1.6ｍ、短径1.4ｍの楕円形を呈する。完掘していないが、検出した深さは0.5ｍを測る。掘り方内に石組みの井側を有する。井側は、大きさ20～４0cmの河原石を直径約45cmの不整円形に配列し、これを基底としてその上部に同大の河原石を４段積み上げている。

井　戸２出土遺物（第19図、図版10）

77は土師器皿である。復元口径8.0cm、器高1.2cmを測る。

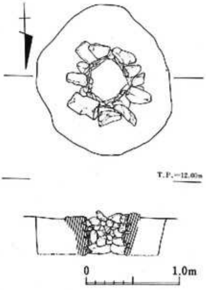
78は瓦器椀とみられる。復元口径12.0cmを測る。口縁部は、直線的に上方にのび端部は丸くおさめる。底部は欠損しているが、高台は無いものと思われる。

79は瓦器椀である。復元口径13cm前後、器高3.3cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。体部外面は、指オサエが顕著に認められ、内面にはヘラミガキが施される。高台は伴わない。

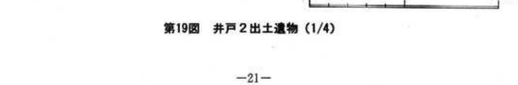
80は土師器羽釜である。復元口径28cm前後を測る。口縁端部は玉縁状に肥大させる。内面には強い横ナデによる稜が認められる。

81は青磁碗である。細片のため口径は不明である。龍泉窯系のものと思われる。

82は白磁碗である。細片のため口径は不明である。口縁端部は玉縁状を呈する。



第18図　井戸２平・断面図（1/40）



第19図　井戸２出土遺物（1/4）

井　戸３（図版４）

２区の掘立柱建物４の東隣で検出した。東側は調査区外に広がる。検出時の平面形態は長径1.9m、短径1.6mを測る。完掘はしていないが、検出した深さは、約0.9mを測る。掘り方内に、石組みの井側を有する。井側は、大きさ20～３0cmの河原石を積み上げているが、北側の大半は石を抜き取られている。

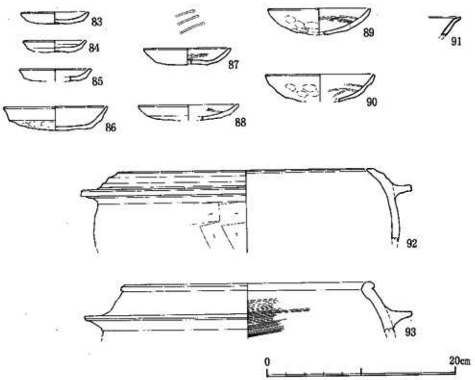
井　戸３出土遺物（第20図、図版11）

83～86は土師器皿である。最も小さいもので復元口径6.6cm、器高1.2cm、最も大きいもので復元口径10.9cm、器高2.5cmを測る。いずれも遺存状態は不良である。

87・88は瓦器皿である。87は復元口径9.0cm、器高1.8cmを測る。88は復元口径10.4cmを測る。いずれも内面に平行状の暗文及びヘラミガキが施される。

89・90は瓦器椀である。89は口径10.8cm、器高2.8cmを測る。90は復元口径10.4cmを測る。いずれも内面にヘラミガキが施される。89は高台を伴わないと思われる。

91は白磁碗である。細片のため口径は不明。



第20図　井戸３出土遺物（1/4）

92は瓦器羽釜である。復元口径27.0cmを測る。口縁部は内湾し、外面には段を巡らせる。体部外面には、工具によるケズリが施される。

93は土師器羽釜である。復元口径26.0cmを測る。口縁部は玉縁状に肥大させる。口縁部内面にはナデによる稜を有し、体部内面には横方向のハケメを施す。

第5項 土　坑

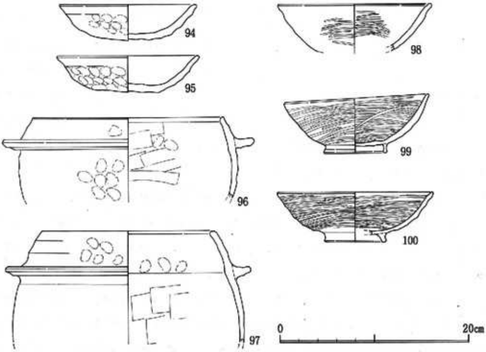
土 坑1

掘立柱建物1の北隅から約1.2m南で検出した。検出時の平面形態は、径約0.4mの円形を呈する。埋土は茶褐色粘質土である。ここより検出した遺物は、いずれも遺存状態が良好である。

土 坑1出土遺物（第21図、図版8・11）

94・95は土師器坏である。94は口径14.4cm、器高3.6cmを測る。口縁部はわずかに外反する。95は口径14.8cm、器高3.8cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。いずれも体部外面に指オサエが顕著に認められる。

96・97は土師器羽釜である。96は復元口径10.0cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。内面には横ナデによる稜を有する。体部外面には指オサエが、内面には工具による横方向のケズリが施される。



第21図　土坑1出土遺物（1/4）

97は復元口径18.0cmを測る。口縁部は内側に向かって緩やかに延び、外面は段を巡らす。端部は丸くおさめる。体部外面には、工具による横方向へのケズリを施す。いずれも全体にススの付着が認められる。

98～100は瓦器椀である。98は復元口径16.0cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、内面に一条の沈線を有する。体部内外面にヘラミガキを密に施す。

99は口径15.2cm、器高5.8cm、高台径6.4cmを測る。口縁部は外側に向かって緩やかに延び、端部は丸くおさめる。内外面とも密にヘラミガキを施す。

100は復元口径16.0cm、器高5.3cm、高台径6.0cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。内外面に密にヘラミガキを施す。高台はやや低く、「ハ」字状を呈し、その断面形態は逆台形を呈する。

土　坑2

1区中央よりやや東、井戸1の3.8m南で検出した。平面形態は、不定円を呈し、長径1.9m、短径1.4mを測る。深さは約0.2mを測る。遺物は117のみ検出した。

土　坑2出土遺物（第23図、図版12）

117は白磁皿である。細片であるため口径は不明。

土　坑3（第22図、図版4）

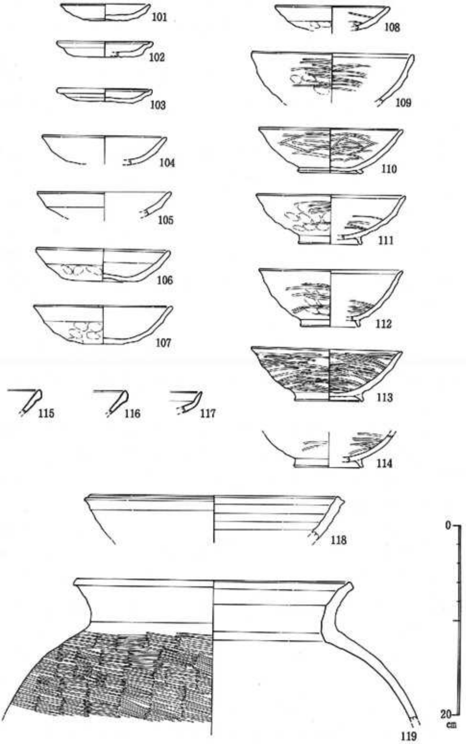
第22図　土坑3断面図（1/40）

2区の井戸3の0.5m北で検出した。東部分の掘り方が調査区の壁に一部分かかるため全容は明らかでないが、平面形態は長径約2m前後、短径約1.8mの不定円を呈する。断面形態は半楕円を呈し、深さは約0.6mを測る。埋土は茶褐色粘質土で、部分的に黄色粘質土を含む。

土　坑3出土遺物（第23図、図版8・12）

101～105は土師器皿である。101は口径9.4cm、器高1.7cmを測る。底部外面には糸切り痕が認められる。102は復元口径10.0cm、器高1.6cmを測る。口縁部は受け上がり、端部は丸くおさめる。103は口径9.8cm、器高1.3cmを測る。口縁部は外反し、外面に面をなす。104は復元口径13.0cmを測る。105は復元口径14.0cmを測る。

106・107は土師器坏である。106は復元口径14.0cm、器高3.4cmを測る。口縁部は直線的に延び端部は丸くおさめる。107は復元口径14.4cm、器高4.1cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。いずれも口縁部には横ナデが施され、体部外面には指オサエが顕著に認められる。



第23図　土坑２・土坑３出土遺物（1/4）

108～114は瓦器椀である。108は復元口径12.0cmを測る。高台部分は欠損している。

109は口径17.0cmを測る。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部は外側にわずかにふくらみをもつ。

110は口径15.0cm、器高4.7cm、高台径6.0cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部はくおさめる。内外面ともにヘラミガキが密に施される。高台はやや低く「ハ」字状を呈し、断面形態は逆台形を呈する。

111は復元口径15.6cm、器高5.2cm、高台径6.6cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は内面に強い稜をもつ。112は口径15.0cm、器高6.0cm、高台径6.0cmを測る。口縁部は外反し、内面には横ナデによる段を有する。いずれも高台は比較的高く細身で、その断面形態は鈍い逆二等辺三角形を呈する。

113は口径15.0cm、器高5.5cm 、高台径7.0cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部はゆるやかな稜をもつ。内外面には非常に密にヘラミガキを施す。高台はやや低く「ハ」字状を呈し、その断面形態は逆台形を呈する。

114は高台径7.0cmを測る。口縁部は欠損。

115・116は白磁碗である。いずれも細片のため口径は不明。口縁部は玉縁を呈する。

118は須恵器鉢である。復元口径26.0cmを測る。119は須恵器甕である。口径29.0cm

土　坑4

1区の東端から約7.0m西で検出した。平面形態は不定円を呈し、長径約8.0m、短径約6.0mを測る。完掘していないが、深さは最も浅いところで約0.6mを測る。西側では溝1に東側では調査区を南北に横切る砂利層に、その両端の一部分がかかる。その新旧は、溝1及び砂利層が古い。

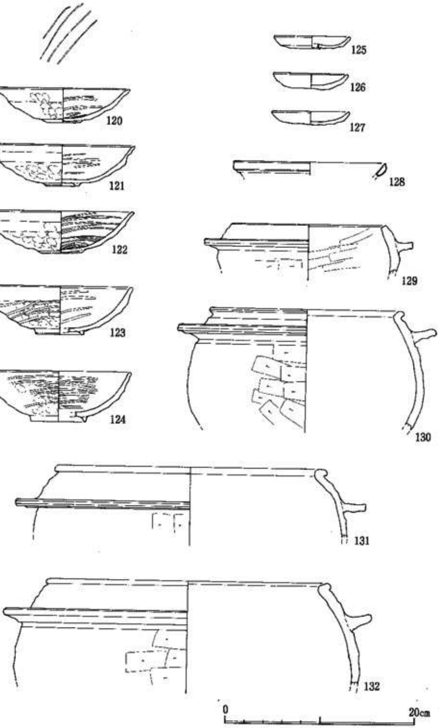
土　坑4出土遺物（第25図、図版12・13）

120～124は瓦器椀である。120は口径14.0cm、器高3.6cm、高台径3.2cmを測る。口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめる。内面見込み部には平行状の暗文を施す。高台は低く、形骸化している。断面形態は逆台形を呈する。

121は復元口径15.0cm、器高4.4cm、高台径3.2cmを測る。口縁部は外面に横ナデによる稜を有する。体部外面は指オサエが顕著に認められる。高台は低く、断面形態は三角形を呈する。

122は口径15.7cm、器高4.5cm、高台径4.1cmを測る。123は口径15.0cm、器高5.1cm、高台径4.8cmを測る。いずれも口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめる。内面にはヘラミガキを密に施す。高台は低く、断面形態は逆台形を呈する。

124は復元口径15.0cm、器高5.3cm、高台径5.6cmを測る。口縁部は外側にむかって延びる。内外面ともに密にヘラミガキを施す。高台はやや低く、底部にほぼ垂直に貼り付く。断面形態は逆台



第24図　土坑４出土遺物（1/4）

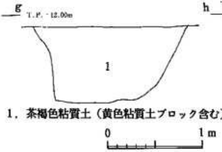
形を呈する。

125〜127は土師器皿である。復元口径8.0cm、器高1.3〜1.6cmを測る。いずれも遺存状態は良好である。

128は白磁碗である。復元口径16.0cmを測る。

129〜132は土師器羽釜である。最も小さいもので復元口径16.0cm、最も大きいもので29.0cmを測る。129は口縁部外面は磨滅が激しいため、明瞭な段をもたない。体部内外面には工具によるケズリを施す。

130〜132は口縁部端部を玉縁状に肥大させる。いずれも体部外面には工具による横方向のケズリを施し、130・132にはススの付着が認められる。



第25図　土坑5断面図（1/40）

土　坑5（第24図）

1区東端より約5.0m西側、東西に約7.6mの試掘坑の西隣で検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径約1.7m、短径約1.5mを測る。断面形態は逆台形を呈し、深さは0.7〜0.8mを測る。埋土は1層のみで茶褐色粘質土であるが、部分的に黄色粘質土をブロック状に含む。

土　坑5出土遺物（第26図、図版13・14）

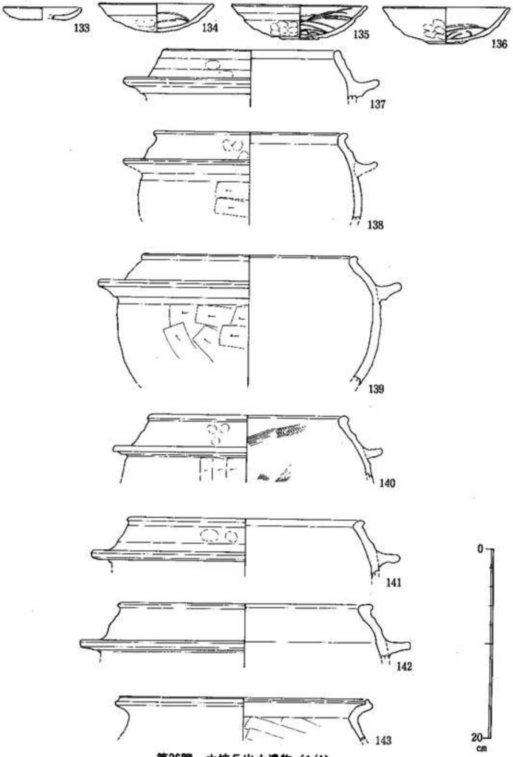
133は土師器皿である。復元口径8.0cm、器高1.3cmを測る。

134は瓦器椀である。復元口径12.0cm、器高3.0cmを測る。内面にヘラミガキが認められる。高台は伴わない。

135・136は瓦器椀である。135は復元口径14.0cm、器高3.6cm、高台径3.4cmを測る。口縁部はわずかに外反しながら外側に延び、端部は丸くおさめる。136は口径13.2cm、器高3.8cm、高台径3.6cmを測る。口縁部は外側に延び、端部は丸くおさめる。いずれも内面にはヘラミガキを密に施す。高台は形骸化している。

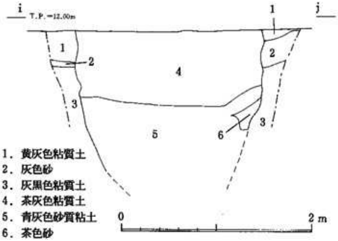
137〜142は土師器羽釜である。いずれも遺存状態は不良である。口径は最も小さいもので18cm前後、最も大きいもので26cm前後を測る。137は口縁部がやや内湾し端部は丸くおさめる。外面に緩やかな段を巡らす。138〜142は口縁部が玉縁状に肥大する。いずれも外面に横ナデを施し、緩やかな段を巡らす。139・140は体部外面に工具によるケズリを施す。137〜139は、外面にススの付着が認められる。

143は土師器甕である。体部の上部は「く」字状に大きく屈曲し、口縁部は内側につまみ出す。内面には工具によるケズリを施す。胎土に片岩を含む。



第26図　土坑５出土遺物（1/4）

土　坑6（第27図）



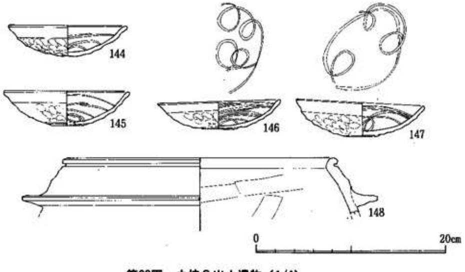
第27図　土坑6断面図（1/40）

1区の西側、溝1の約1.0m北で検出した。平面形態は円形を呈し、径約2.0mを測る。完掘していないが、断面形態は逆台形を呈していると思われる。検出時の深さは、約1.5mを測る。埋土は大きく2層に分層できる。上層は茶灰色粘質土で、掘り方上面より約0.8mを測る。その下層は青灰色砂質粘土である。青灰色砂質粘土の西側部分で茶色砂が一部分認められる。遺物の多くは下層の青灰色砂質粘土から検出した。

土　坑6出土遺物（第28図、図版14）

144～147は瓦器椀である。口径は12.2～13.4cm、器高2.9～3.5cm、高台径約3.0cmを測る。いずれも口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。外面には指オサエが顕著に認められ、内面見込み部には暗文が施される。144は高台は伴わない。145～147の高台は非常に低く、形骸化している。

148は土師器羽釜である。復元口径28.0cmを測る。口縁部は玉縁状を呈し、内面に稜を有する。



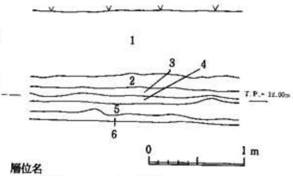
第28図　土坑6出土遺物（1/4）

第Ⅳ章　第37次調査の成果

第1節　層　　序

第1項　基本層序（第29図）

調査区の基本層序は上層より、盛土約70cm、近年の耕作土約20cmの順で堆積がみられ、この下層に、遺物包含層である緑灰色粘質土が約10cmの厚さで堆積する。この緑灰色粘質土に代わり、茶褐色粘質土の堆積が認められる場所もある。続いてこの下層に灰色シルトが３～５cmの厚さでみられる。この灰色シルトの下層に堆積する灰色粘質土の上面で遺構を検出した。灰色粘質土は10～25cmの幅で認められる。今回遺構を検出することができたのは、この面のみである。灰色粘質土の下層は茶褐色細砂が認められる。



層位名
1．盛土　　2．耕土　　3．緑灰色粘質土
4．灰色シルト　　5．灰色粘質土　　6．茶褐色細砂

第29図　基本層序（1/40）

第2項　包含層出土遺物（第30～32図、図版９・15・16）

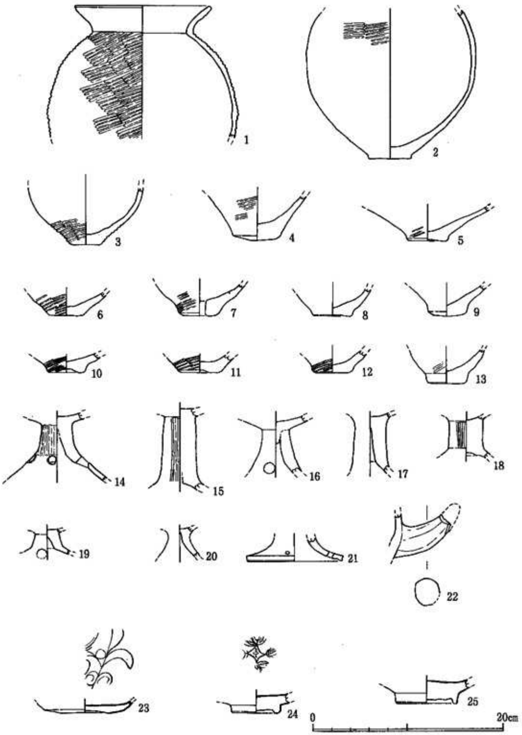
包含層からは、弥生～室町時代の遺物を検出した。いずれも遺存状態は不良で、図上で復元しているため、口径や底径の計測値は推定値を示す。１～21は弥生土器で、いずれも弥生時代終末期に属する。１・２は甕である。１は口径が14cm前後である。口縁部は「く」字状に大きく開き、端部はやや上方につまみあげる。外面には右上がりにタタキを施す。２は底径4.8cmを測る。底部の突出は小さく、底面は平らである。体部外面には、タタキを施す。３～13は底部である。７には焼成前の穿孔が認められる。14～21は高坏脚部である。14は脚柱部は短く、外面にはヘラミガキが認められる。22は土師器甑の把手である。

23～25は青磁である。23は皿で、内面に草花文を毛彫りする。底面を露胎とする。龍泉窯系とみられる。24・25は碗である。24は底径4.6cmを測る。見込み部に草花文を毛彫りする。

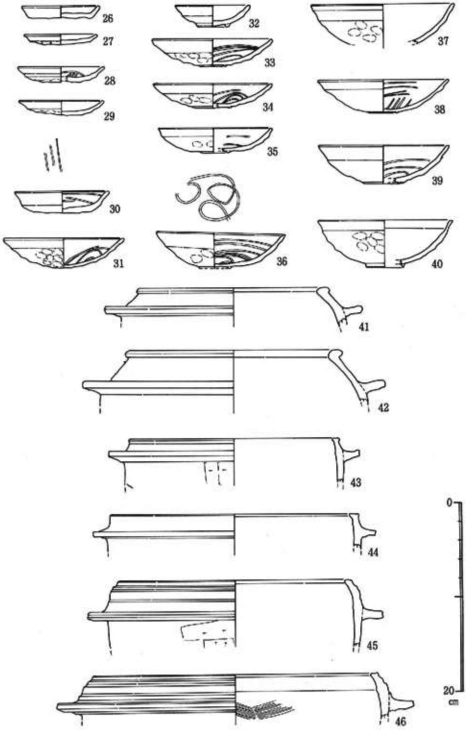
26は土師器皿である。口径8.0cm、器高1.2cmを測る。

27～30は瓦器皿である。27は口径7.6cm、器高1.1cmを測る。30は口径9.8cm、器高2.3cmを測る。内面に平行状の暗文を施す。

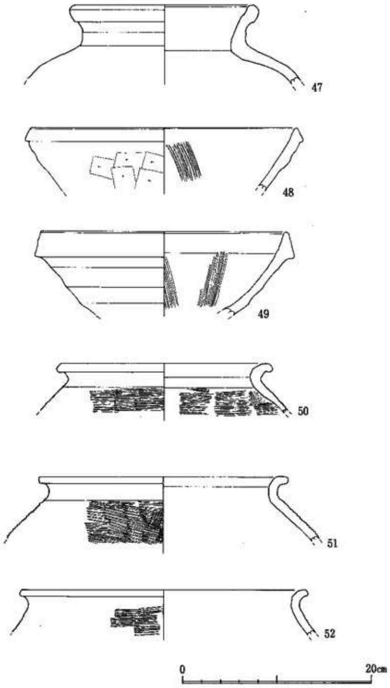
32はミニチュア瓦器椀である。口径7.8cm、器高2.3cm、高台径2.8cmを測る。口縁部はやや外反



第30図　包含層出土遺物１（1/4）



第31図　包含層出土遺物２（1/4）



第32図　包含層出土遺物３（1/4）

し、端部は丸くおさめる。高台の断面形態は逆台形を呈し、ほぼ直立する。

31・33～40は瓦器椀である。31は復元口径12.6cm、器高3.1cmを測る。高台を伴わない。36は口径13.5cm、高台径3.0cmを測る。高台端部を若干欠損するが、器高は約3.8cmである。見込み部に螺旋状の暗文を施す。38は見込み部に平行状の暗文を施す。41・42は土師器羽釜である。口径は前者が20cm前後、後者が22cm前後である。43～46は瓦器羽釜である。43・44は口縁部がほぼ直立し端部は水平な面をなす。45・46は口縁部がやや内湾し、外面には段を巡らせる。

47は陶器壺である。口径は19cm前後である。体部内外面の一部に紫褐色の自然釉が認められる。

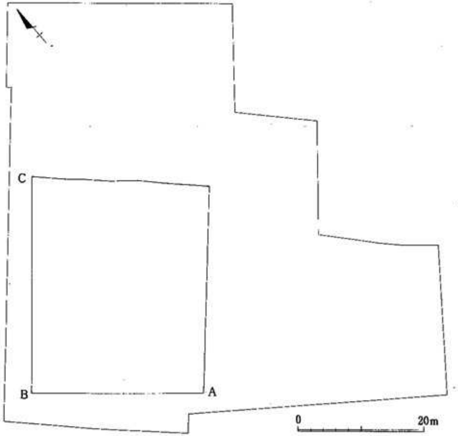
48は瓦器播鉢で、口径は28cm前後である。体部外面には工具によるケズリが施される。

49は陶器播鉢で、口径は26cm前後である。口縁部は内傾し、外面は面をなし下方に拡張する。

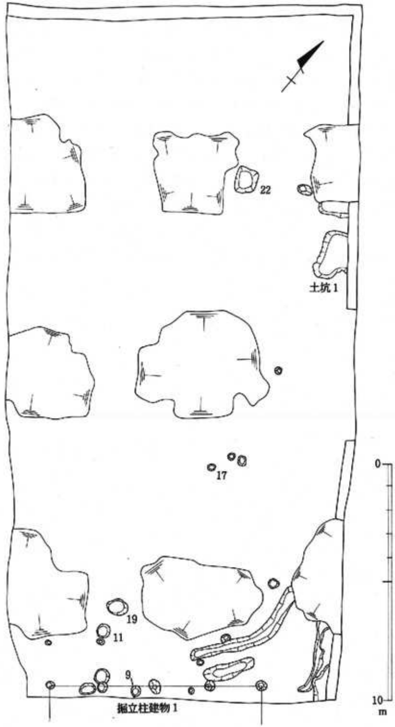
50は瓦器甕である。口径は22cm前後である。体部外面には平行タタキを施す。

51は須恵器甕である。口径は26cm前後である。体部外面には平行タタキを施す。

52は土師器甕である。口径は30.0cm前後である。体部外面にはタタキを施す。



第33図　調査区位置図（1/600）



第34図　遺構平面図（1/80）

第２節　遺構各説

第１項　掘立柱建物

掘立柱建物１（第35図、図版５）

調査区東端で、東壁に沿って検出した。調査区外に延びるため、その全容は明らかではない。検出時の規模は桁行４間（総長8.5m）、梁間１間以上で、桁行の平均は、2.1mを測る。柱穴の深さは、最も浅い柱穴13で約15cm、最も深い柱穴５で約50cmを測る。埋土は柱穴１が、灰茶色粘質土、柱穴２が灰茶色粘質土、それ以外の柱穴は暗灰色粘質土である。

掘立柱建物１出土遺物（第36図、図版17）

柱穴１・２からのみ遺物を検出した。

55は柱穴２から検出した瓦器皿である。復元口径９cm前後である。口縁部はわずかに外反する。内外面ともに磨滅が著しいため、調整の詳細は明らかでない。

58は柱穴１から検出した瓦器椀である。復元口径14cm前後である。内外面ともにヘラミガキを施す。

第２項　柱　穴

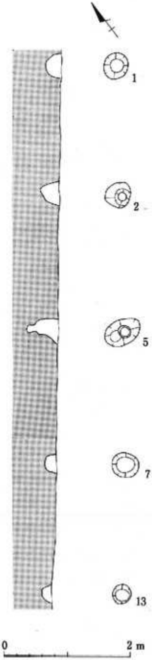
建物を構成しない柱穴で、17基検出した。その半数以上は調査区の中央より東側部分で検出した。平面形態はいずれも不定円である。径は、20～80cmを測る。

柱　穴出土遺物（第36図、図版９・17）

53は柱穴11、54は柱穴22、56・61は柱穴17、57・60は柱穴19、59は柱穴９よりそれぞれ検出した。

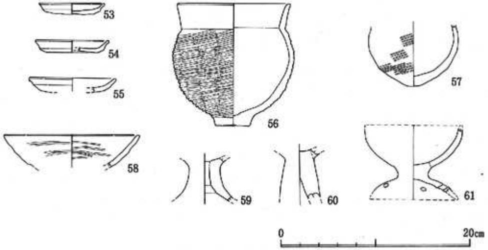
53・54は土師器皿である。53は口径6.8cm、器高1.2cmを測る。54は復元口径7.6cm、器高1.3cmを測る。いずれも口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。

56～61は弥生時代終末期から古墳時代初頭に属する。56は甕である。復元口径11.6cm、器高13.0cm、底径3.4cmを測る。わずかに外側に開き気味の口縁部をもち、体部は球形状を呈する。体部外面には右上がりのタタキを施す。57は甕である。体部は球形状を呈し、



第35図　掘立柱建物１
平・断面図（1/60）

底部は丸底化の傾向がみられる。体部外面には右上がりのタタキを施す。内面は磨滅が著しいため、詳細は不明である。59〜61は高坏である。59・60は脚柱部のみが遺存する。61は口縁端部を欠損しているが、復元口径10.0cmを測る。脚裾部に５方向の円形スカシ孔を穿つ。内外面ともに表面の剥離が著しいため、詳細は不明である。



第36図　掘立柱建物１・柱穴出土遺物（1/4）

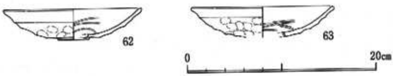
第３項　土　坑

土　坑１

調査区中央よりやや北側で、北壁に沿って検出した。調査区外に延びるため、その全容は明らかでない。その平面形態は不定形で、検出時の規模は、長径約2.0m、短径約1.0mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは最も深いところで約11cmを測る。

土　坑１出土遺物（第37図、図版17）

62・63は瓦器椀である。62は復元口径14.4cm、器高3.2cm、高台径3.0cmを測る。内面にはヘラミガキを施す。高台は低く、断面形態は三角形を呈する。63は復元口径15.0cmを測る。



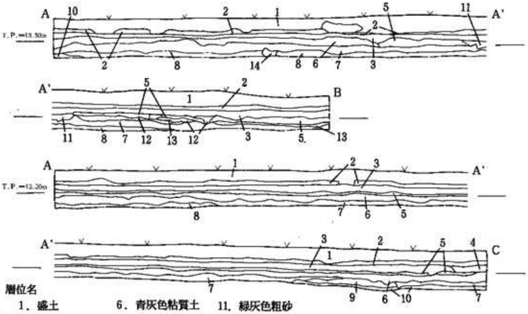
第37図　土坑１出土遺物（1/4）

第Ⅴ章　第38次調査の成果

第1節　層　　序

第1項　基本層序（第38図）

調査区の基本層序は上層より、盛土約40cm、近年の耕作土10～20cm、この耕作土の床土である灰茶色砂質土及び茶灰色砂質土が10～30cm堆積する。この床土の下層に遺物包含層である緑灰色粘質土及び青灰色粘質土が認められる。これらの遺物包含層の堆積は一様で無く、調査区西壁では、緑灰色粘質土と青灰色粘質土が５～25cmの幅で横並びの堆積が認められるが、南壁では、緑灰色粘質土が約５cm堆積する下層に10～25cmの幅で青灰色粘質土が堆積する。この下層に黄灰色シルトが堆積する。黄灰色シルトは遺物包含層直下に位置することや、周辺の既往調査の層位などから遺構面であると判断したが、今回の調査では遺構は検出できなかった。この層の上面からは、近年の浄化槽埋め込み時の攪乱や水田への給水用の土管の掘り方を検出した。黄灰色シルトの下層は、灰色を基調とする砂礫の堆積が認められる。

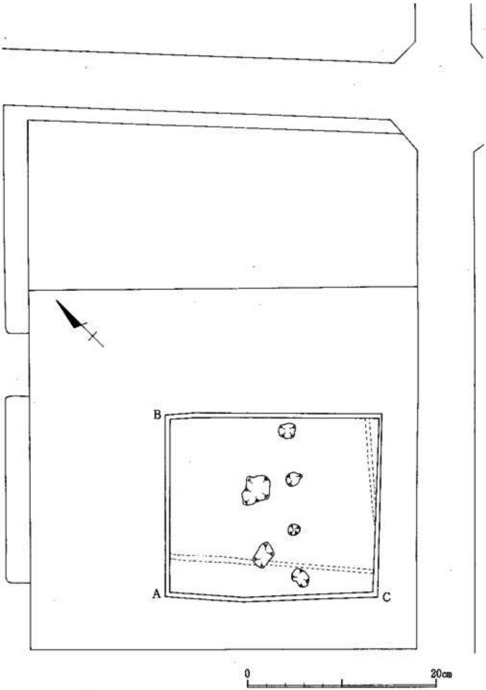


層位名

1．盛土	6．青灰色粘質土	11．緑灰色粗砂
2．耕土	7．黄灰色シルト	12．緑灰色シルト
3．灰茶色砂質土	8．青灰色微砂	13．淡灰色シルト
4．茶灰色砂質土	9．灰色砂礫	14．暗灰色粘質土
5．緑灰色粘質土	10．灰色粗砂	

0　　5 m

第38図　西壁（上）・南壁（下）土層断面図（1/100）

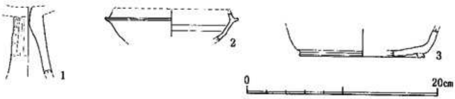


第39図　調査区平面図（1/400）

第２項　包含層出土遺物（第40図、図版17）

１は高坏である。脚柱部のみが遺存する。脚柱部外面にヘラケズリを施す。弥生時代に属する。

２・３は須恵器坏である。２は口縁部を欠損するが、12cm前後を測る。古墳時代に属する。３は復元口径13cm前後である。奈良時代に属する。



第40図　包含層出土遺物（1/4）

第VI章　ま　と　め

第36次調査について

今回の調査により、第36次調査地点では、掘立柱建物４棟、井戸３基、土坑６基、溝２条を、検出した。まず、掘立柱建物は、検出した遺物の出土位置が柱穴掘り方と柱痕跡のいずれとも区別できなかったことと、細片であるため、遺物から時期を特定することは困難である。ただ、検出した遺物は、13世紀前葉～14世紀中葉に比定できる。４棟の掘立柱建物の関係であるが、いずれの建物もその方向性は同じで、それぞれの建物が、ある程度意識しあって建てられていると考えられるため、比較的近い時期の所産である可能性が高い。

掘立柱建物４は、それを構成する柱穴が井戸３と重複している。その重複関係から、掘立柱建物が先行していることが明らかである。井戸３は、検出した瓦器椀が高台が消滅した段階のものであるので、14世紀末に比定される。このことから、掘立柱建物４はこれ以前であることが窺える。

以上のことから、今回検出した掘立柱建物群は13世紀前葉～14世紀後葉に属すると考えられる。

井戸は３基検出したが、いずれも完掘していないため、その開削時期は確定しがたい。井戸１は、２・３に比べ、検出した遺物に若干古い様相がみられ、比較的時期差が少なく、13世紀中葉の所産とみられる。これらの遺物は、井戸の上層に位置し、井戸廃棄の時期と考えられる。その遺物にミニチュア瓦器椀が含まれていることは、示唆に富んだ例といえよう。

土坑は６基検出したが、それぞれ検出した遺物から時期を推定することが可能である。土坑１は、６基の中で最も古いと考えられる。11世紀後葉に比定できる。土坑３は12世紀初頭に、土坑４は14世紀初頭、土坑５は14世紀中葉、土坑６も14世紀中葉にそれぞれ比定できる。

第37次調査について

第37次調査地点は、第36次調査地点の東側に隣接している。第36次調査の結果、検出した遺構は第37次調査地点の方向への広がりが予想された。しかし、第37次調査地点では、遺構調査区の東隅にわずかに認められるのみであった。

掘立柱建物１は遺物が細片であるため、時期は不明である。土坑１は、14世紀中葉～後葉に比定できる。

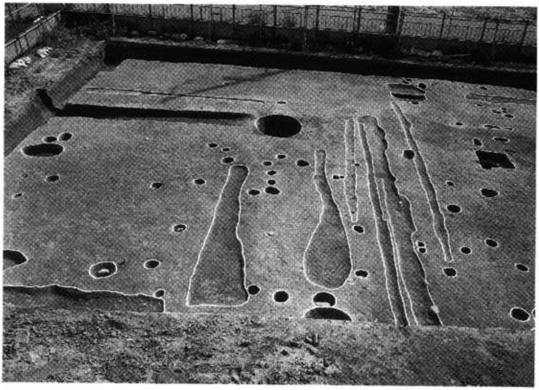
また、第37次調査地点周辺は小字名が大福寺で、創建年代は明らかでないが、明治時代まで同名の寺院が存続していたとされている。当該調査区は、大福寺の中心部分と想定されていたが、今回の調査では、寺院関連の遺構は認められなかった。

おわりに

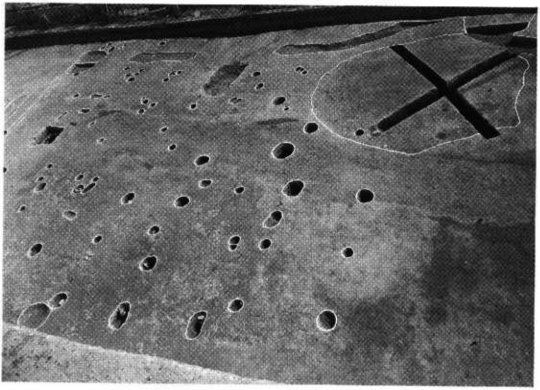
今回調査を行った場所は豊中遺跡の最も西端に位置する。既往調査成果によると、当該調査地点付近は、一部、古墳時代の遺構が認められる場所もあるが、そのほとんどが中世の遺構で、時期は、11世紀～14世紀に属する。遺構は、特に井戸が顕著に認められ、12基が第36次調査地点から半径約200m以内の場所で検出されている。これは現在までに当遺跡内で確認された中世の井戸の約75%にあたる。しかし、掘立柱建物は必ずしも井戸の周辺で検出されず、集落の様子は不明確であった。

今回の調査によって、掘立柱建物と井戸がある程度のまとまりをもって検出されたことから、当該調査地点が、この周辺の中世における集落の中心部分とみることができよう。

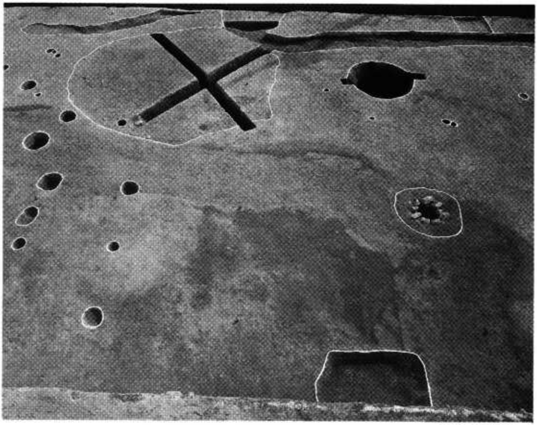
図　　版



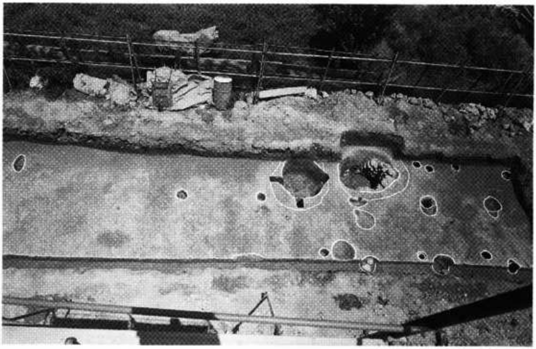
1区（東側部分）



1区（中央部分）



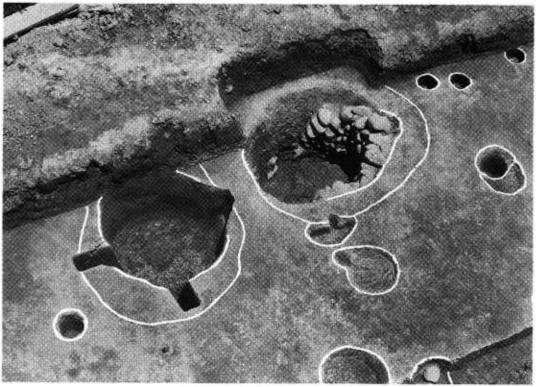
1区(西側部分)



2区全景(南から)

1区井戸1（南から）

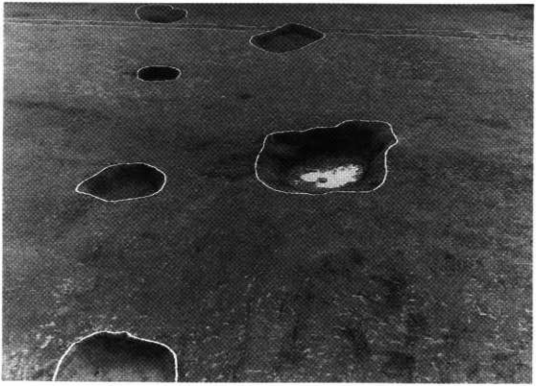
1区井戸2（南から）



2区　土坑3（左）・井戸3（右）

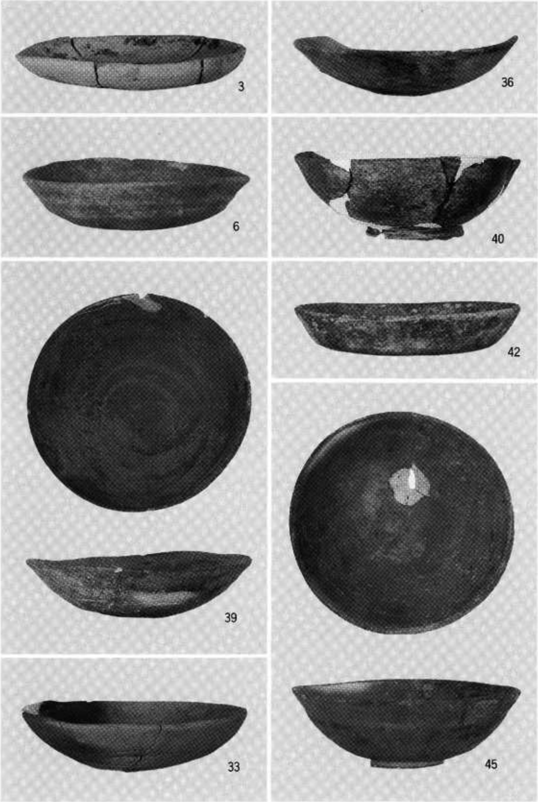
全景(南から)

掘立柱建物1（南から）

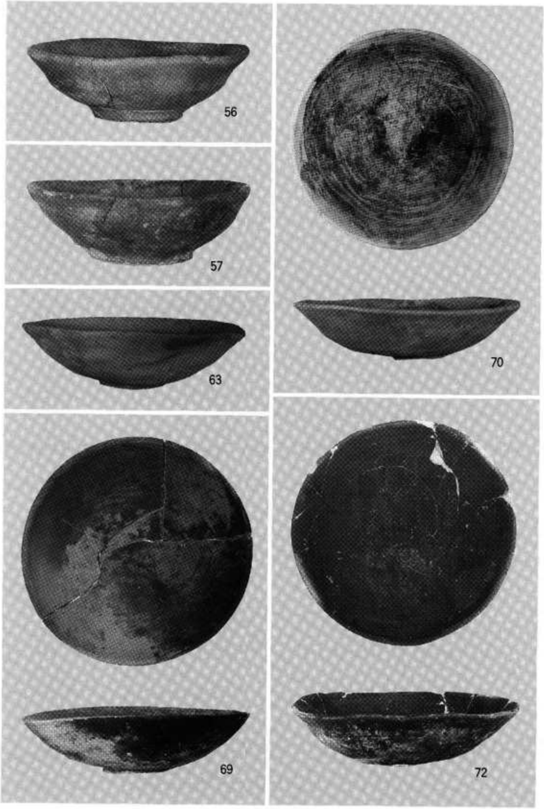


近景(北から)

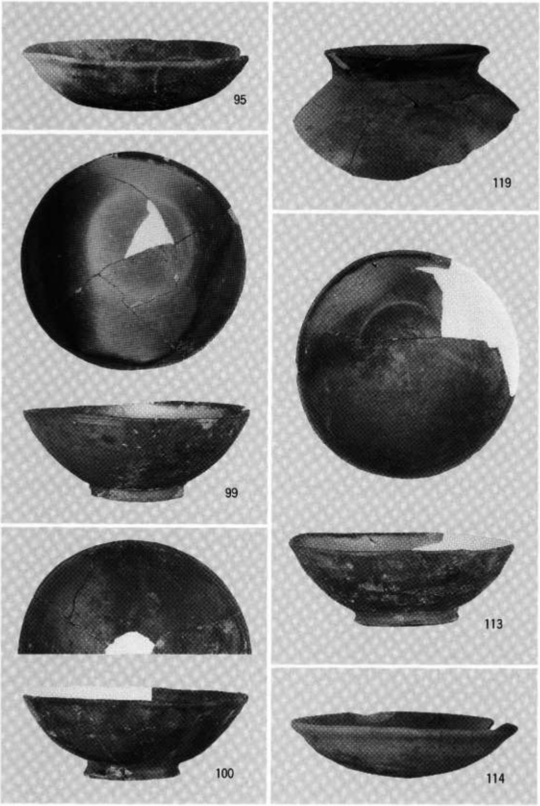
図版6　第36次調査出土遺物



図版7　第36次調査出土遺物



図版8　第36次調査出土遺物



1

36

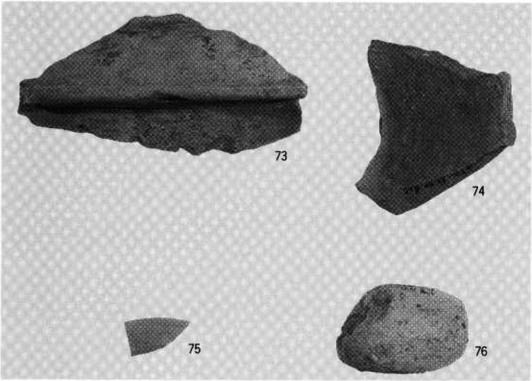
47

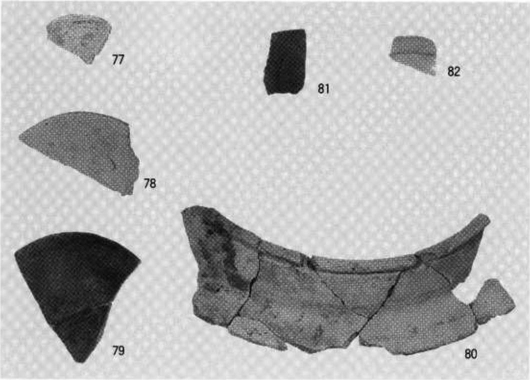
56

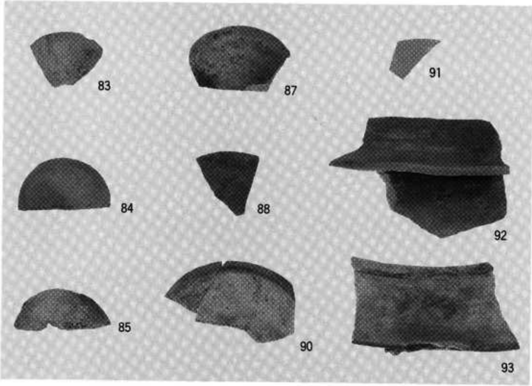
57

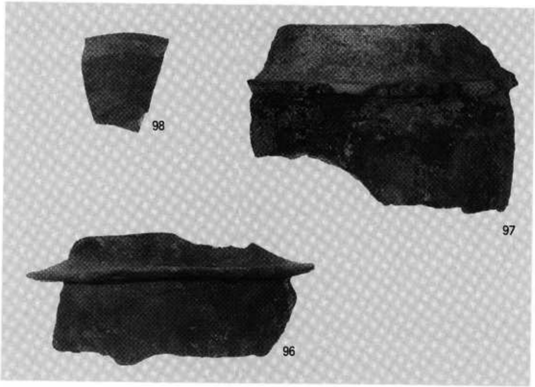
61

図版10　第36次調査出土遺物



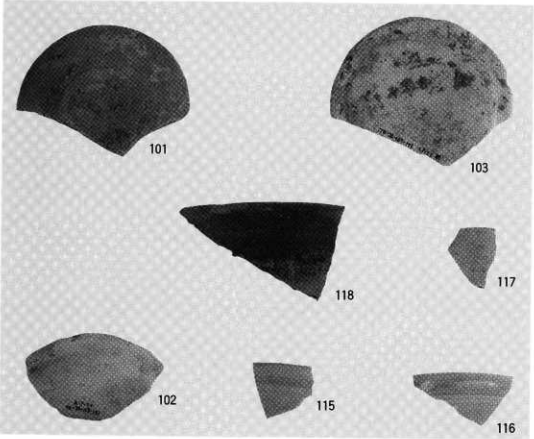


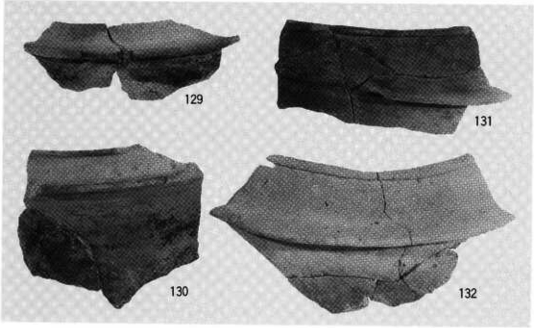




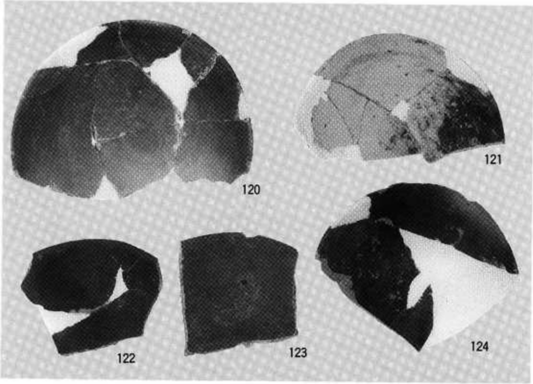
図版11　第36次調査出土遺物

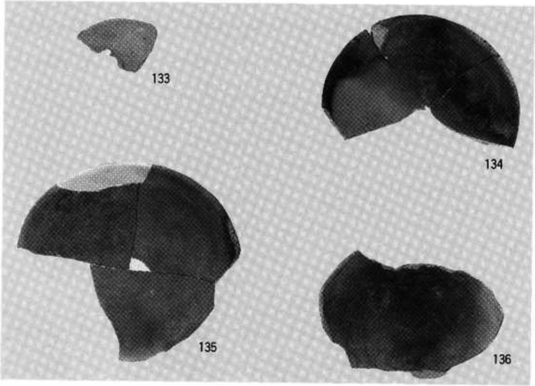
図版12　第36次調査出土遺物

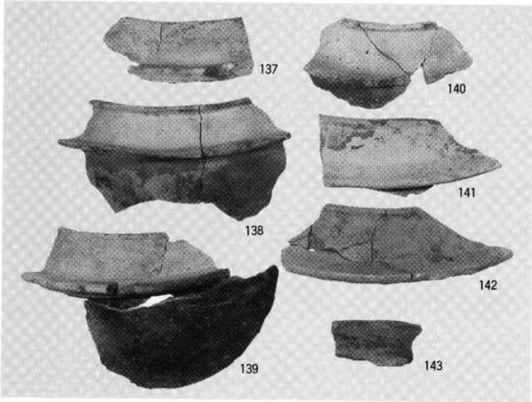


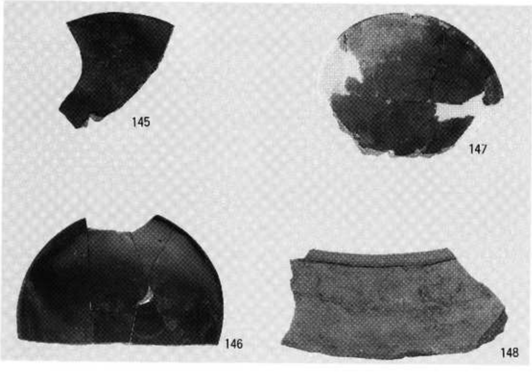


図版13　第36次調査出土遺物

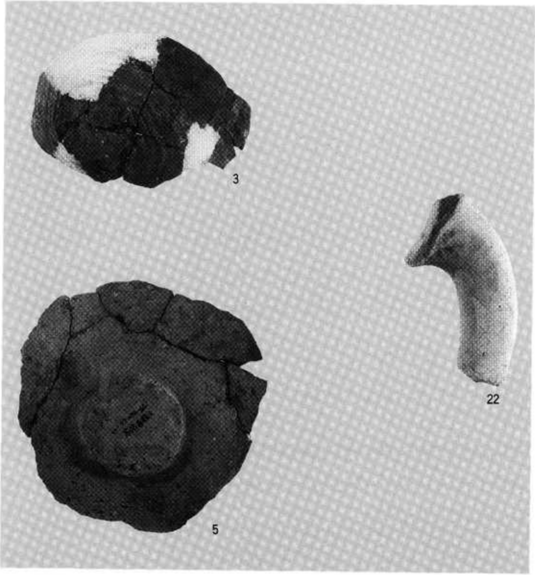


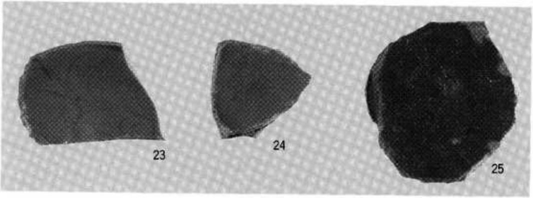


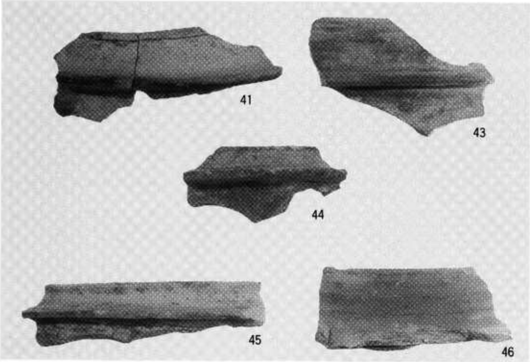

137
140
138
141
142
139
143

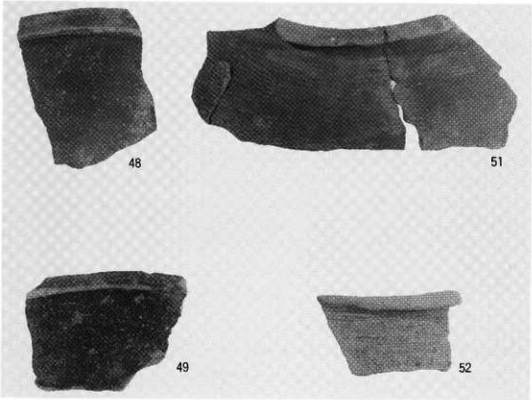

145
147
146
148

図版15　第37次調査出土遺物

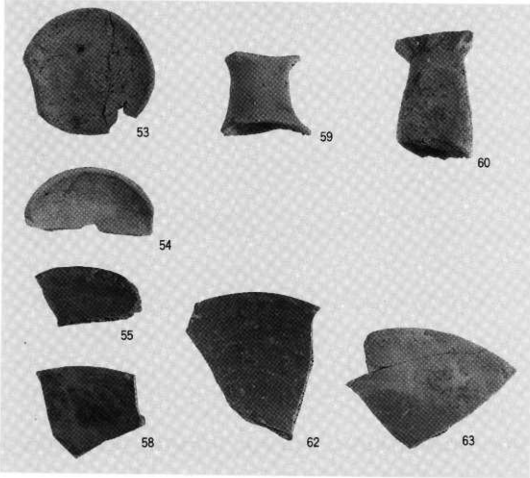


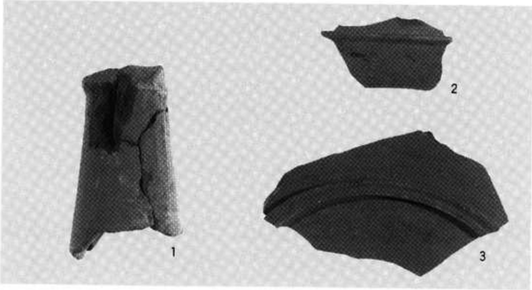



41
43
44
45
46


48
51
49
52

図版17　第37次(上)・第38次(下)調査出土遺物





報告書抄録

ふりがな	とよなかいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	豊中遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	泉大津市文化財調査報告
シリーズ番号	27
編著者名	虎間麻実
編集機関	泉大津市教育委員会
所在地	〒595　大阪府泉大津市東雲町9番12号　　TEL 0725−33−1131
発行年月日	西暦　1995年3月28日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
豊中	大阪府泉大津市豊中445−1,446−1,447−3,460−1	272060		52度48分10秒	167度02分15秒	19910415〜19910704	695	鉄骨5階建て社員寮建設に伴う事前調査
	豊中451−1,452,453,454,457−1			52度45分15秒	167度01分30秒	19911105〜19911206	1,100	鉄骨平屋建て店舗建設に伴う事前調査
	東豊中町2丁目957−7			52度33分40秒	167度20分10秒	19911216〜19920110	500	鉄骨平屋建て店舗建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
豊中	集落 社寺跡	縄文 古墳 平安 中世	掘立柱建物 4棟 井戸 3基 土坑 6基 溝 2条	瓦器椀・皿 土師器羽釜 土師器皿	中世の集落跡
			掘立柱建物 1棟 土坑 1基	瓦器椀・皿 土師器羽釜・瓦器羽釜 弥生土器	中世の集落跡
			遺構は検出されなかった	須恵器坏 身・蓋 土師器高坏 脚部	

泉大津市文化財調査報告27
豊中遺跡発掘調査報告書
1995年3月

発 行 泉大津市教育委員会
編 集 社 会 教 育 課
泉大津市東雲町9番12号

印 刷 ダイエー印刷株式会社
泉大津市池浦町3丁目11－11